

「結局のところ、世の中カネやで。」

江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』の主人公は、定職につかず、趣味も続かず、退屈な毎日
を過ごしていた。そんな彼に、ついに夢中になれることが見つかった。新たな下宿先の天
井裏から、他の住人の生活を垣間見ることである。

覗いた穴から、キレイとは言えない性根の部分が見えると、人はその場から離れられな
くなる。垣間見には、魅惑が宿っているのだ。そのような、目の逸らせない作品を描きた
くなった。

指で表すジェスチャーが面白く、そこから何か派生できないか。元々あったこのアイデ
アを土台に、穴は指で作ることにした。お金を示すジェスチャーから、現す裏の顔として、
「金の亡者」が浮かび上がった。

下から上へ、段階的に構成する。ふつふつと心情が湧き上がる様を表現した。

下：お金を表すジェスチャーと福澤諭吉の顔

中：5本すべての指で作った輪と0の羅列

上：OKサインと笑った口

3つを繋げると、「お金(1万円札)があればあるほど(0の数が多いほど)OK(笑みがこぼれる)」
という流れだ。

化けの皮が剥がれてきているため、背景に亀裂が走っている。

これは、2回生のとき、五芸祭に出すために描いたものだ。自分が面白いと思ったイメ
ージを、観る人にも思わせられるか。意思を共有させるために何をどう描けばよいのか。自
分の作品を「人に見てもらおう」という状況を、強く意識しはじめた作品である。

私が、他者の作品の評価を決めるときは、ほとんど第一印象が担っている。「人の印象は
第一印象でほとんど決まる」と言われるが、作品においても、同じではないか。

そのせいだろうか、作品の完成イメージは、「一目見た瞬間に、立ち止まらせる」ことに
重きをおく。「何だ、これは？」と、観た人の心を刺激したい。そこから更に、私が込めた
イメージを、1つでも良いから共有したいのだ。

今回の作品の場合は、「気持ち悪さ」である。色使いなり、皺だらけの手、諭吉の目など、
どこでも良い。「ね、気持ち悪いですよ」と、共有の対話ができれば、制作において、こ
れほど嬉しいことはない。

しかし、一番気持ち悪いのは、人の生活の盗み見に耽る主人公のような、覗く側の人間
ではないかと思うのだ。